

氏名（本籍）	武田恵理（東京都）
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第106号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位論文等題目	作品 京都大学総合博物館蔵 重要文化財「紙本着色聖母子十五玄義・聖体秘跡図」の再現模写 論文 京都大学総合博物館蔵 重要文化財「紙本着色聖母子十五玄義・聖体秘跡図」の再現模写と描画技法の研究
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 歌田真介
（論文第1副査）	聖徳大学 "（文学部） 坂本満
（作品第1副査）	東京芸術大学 "（美術学部） 坂本一道
（副査）	" "（"） 佐藤一郎
（"）	" "（"） 三浦定俊
（"）	東京国立博物館 保存修復課長 神庭信幸

（論文内容の要旨）

【研究概要】

昭和5（1930）年大阪府高槻市で発見された「聖母子十五玄義・聖体秘跡図」（以後『マリア十五玄義図』と呼ぶ）は、1614から1625年の間の作とされる軸装絵画である。図像中のIHSの文字などからイエズス会¹信徒の作品とみられる。本作品の再現模写により画材や描画技法を考察する。

【歴史的背景】

天文12（1543）年に、中国の商船に乗った3人のポルトガル人が種子島に漂着してから、寛永16（1639）年の鎖国まで、数々の西欧の知識がキリスト教と共に伝来した。イエズス会東方巡察師ヴァリニャーノ²（1577来日）は、西日本各地に、セミナリオ等の教育機関を設置した。これらの教育機関では、教課としては神学、哲学、法律、語学、数学、天文学、地理学などを教えた。併置されたと思われる工房では、絵画、銅版画、オルガンなどの楽器、時計などを製作し、さらに絵画や音楽の実技を習得させ、クリスマスなどには宗教演劇も上演された。イタリアからは画僧ニコラオ³が来日し、教会祭壇画の制作や画学生の指導にあたった。文録2-3（1593-1594）年度のイエズス会年報⁴によると、八良尾のセミナリオで学ぶ画学生はテンペラ画8人、油彩画8人、銅版画5人いたとある。彼らは天正遣欧使節（1590帰国）がヨーロッパから持ち帰った絵画を模写し、彩色や形態を学んでいたとも記されている。慶長8（1603）年の日本司教⁵の報告書では、諸教会に信徒作の油絵や壁画が多く飾られ、多くの卓越した画家がいたと記されている。

ルネッサンス様式の絵画は写実的であり陰影法や遠近法が駆使されている。それらは、当時の日本人に強い印象を与え、布教効果が高く需要も多かったという。しかし、その後二百数十年におよぶキリスト教の禁教で、これらの作品のほとんどが消滅あるいは隠蔽された。したがって現存する当時の西洋画法による宗教画の作品数は非常に限られている。そのため当時の技法を知るには、残された作品の研究によって描画技法がどのようなものであったのかを考察、推察するしかない。

【近年の研究】

一方、この時代に制作された南蛮趣味の世俗画として、南蛮屏風や南蛮洋風画と呼ばれる作品群がある。坂本満氏により、この中に宣教師達が献上物として大名や権力者へ贈るため、上記教育機関で修練を積んだ画家に描かせた物があると指摘されている⁶。従来、保存・修復家によって、これらの作品の中に膠だけで描かれたものとは発色や質感、耐水性が異なる作品があるとされてきた。また筆者の観察でも、北川民次⁷のテンペラに共通する、膠だけでは得られない肌合いを持つ作品があった。平成10(1998)年度、神庭信幸氏により、本研究の対象作品である『マリア十五玄義図』が調査報告⁸された。絵具表面の質感、艶、亀裂の生じ方から、油かエマルジョンの展色剤を使用した可能性が示された。平成11(1999)年度には、岡墨光堂により宮内庁『萬国絵図屏風』の絵具試料の分析が行われた。油と膠の双方を含む事が報じられ、膠と油を混ぜた展色剤を用いたか膠下地上に油性絵具で彩色した可能性をあげている。

【研究テーマと目的】

日本では従来、膠と顔料でできた水性絵具が使われた。また中国から一種の油絵である密陀絵技法も伝来している。これら伝統的描画技法を考慮しても、膠と油分が同時に含まれた展色剤を用いたり、双方を併用する描画技法は特殊である。ここで展色剤の違いで描画技法を油画、膠画、テンペラ画の3つに分けて考えてみる。油画の画肌は光沢があり透明な印象を受ける。膠と顔料を練り合わせた絵具では、画肌に光沢が無く不透明な印象の絵になる。テンペラ画はこれら油画と膠画との中間にあたる。水性和油性の液体を混合すると溶け合わず、どちらかあるいは双方がコロイド状に分散して乳濁液になる。この乳濁状の展色剤と顔料を混合した絵具を用いた絵画をテンペラ画という。仕上がった作品の画肌には、やや光沢があり半透明の印象を受ける。テンペラ技法の代表的なものに卵テンペラがある。西欧では、より簡便で表現の応用幅の広い油画技法が考案される15世紀まで、卵か卵に乾性油を加えた卵テンペラが、主たる絵画技法であった。これら油画、膠画、テンペラ画の技法の差異は、作品表面の光沢、発色、質感としてあらわれる。日本では禁教と共に油画やテンペラ画といった西洋画法も廃れた。享保11(1726)年、八代将軍吉宗の命でオランダからもたらされた油画ロイエン作「花鳥図」が江戸の評判となるほど、西洋画は珍しく特殊なものとなっていたのである。

本研究では、当時使用された可能性のある材料を用いて展色剤を作成し、塗布実験を行った。その結果から、描く対象物と何を表現するかで、膠と少量の卵黄を混合したテンペラ、卵白テンペラ、卵黄に荏油を加えたテンペラの3種類の展色剤を使い分けていると推定し、これらを用いて『マリア十五玄義図』の再現模写を行った。

17世紀初期に描かれた本作品は、描かれた当初の状態をよく残す稀有な絵画である。本作品描画技法の研究により、我国で制作された西洋画に対する認識も広がるであろう。描画技法や作品への深い理解が適切な保存につながると考える。

*1 カトリック系修道会

*2 アレッサンドロ・ヴァリニャーノ

*3 ジョバンニ・ニコラオ。ナポリ王国ノラ出身のイルマン。1583年来日。

*4 ペドロ・ゴメスによる。画学生の技術は申し分ないものであったと記録している。

*5 日本司教・ドン・ルイス・デ・セルケイラ

*6 坂本満、1990。

*7 北川民次（1894 - 1989）。アラビアゴムとリンシードを用いたテンペラ作品を制作。「子供の絵と教育」より。

*8 神庭信幸・小島道裕・横島文夫・坂本満「調査研究活動報告 京都大学所蔵「マリア十五玄義図」の調査、『国立歴史民俗博物館研究報告』第76集、1998